

社会的移動とアノミー：その基礎視角をめぐって

三浦，典子

<https://doi.org/10.15017/2328706>

出版情報：哲學年報. 31, pp.149-170, 1972-03-25. 九州大学文学部
バージョン：
権利関係：

社会的移動とアノミー

—その基礎視角をめぐって—

三 浦 典 子

一、はじめに

この小論のテーマは、都市という巨大なメカニズムの中で、あまりにも私化わたくしした人間の行動を分析する概念として、「アノミー」がどれほど有効なものであるかという主題のもとに、アノミー理論の発展と現状をとらえ、今後の課題を追究していくプロセスの中から引き出されたものであり、アノミー研究の基礎視角を確立し、それを具体的レベルに移向するための一つの試みである。

アノミーの概念はデュルケムの古典的な名著以来、現代では主に大衆社会的状況や逸脱行動の分析に好んで用いられてきている。しかしながら、頻繁に用いられれば用いられるほどその概念規定はあいまいになり、多様化してきている。が、それは大ざっぱには社会や集団の凝集力の弛緩、価値体系の混乱等をさす社会的レベルのアノミーと、無気力、孤立感、目標喪失といった個人の心理状況をさす個人的レベルのアノミーとに分類できる。この二つの異なる

レベルのアノミーは區別して用いる必要があることは多くの研究者も述べていることである。たとえばスロールやマートンは、個人的心理的アノミーにアノミアという用語をあてることを提案している。⁽¹⁾このアノミアすなわち個人的レベルのアノミーは、デュルケムの主観的アノミーの系譜をひくもので、現代ではこの normlessness とか powerlessness といった感じの存在を経験的に実証することによって、社会的レベルのアノミー度を測定するということがしばしばなされている。

しかし、かりにこれらの研究が社会的レベルのアノミーと個人的レベルのアノミーとが、どのような連動関係にあるのかを明確につかんだ上でなされていないとすれば、そもそもアノミーとは何なのかというアノミーの原因論を見失い、心理学主義に傾くという、きわめて危険なものになりがちである。ここで取り上げようとしている社会的移動とアノミーにかんする研究も、多くは移動を独立変数とし、normlessness や powerlessness の態度を測定し、その相関をみるというやり方で、アノミーを個人的レベルでのみとらえることで終わっている。

したがって、社会的レベルのアノミーと個人的レベルのアノミーとを統合的に把握するにはどこに視点をすえればいいか、また社会的移動との接点において具体的にはどういった方法で検証が可能であるのか、ということが問題となってくる。そこでこの小論はまず社会的アノミーと個人的アノミーとの連動関係をふまえた上でアノミーを検証する視角を考察する。次に社会的移動との接点において、その視角で切り込んでいくことになる。ただしその分析モデルに基づいた具体的な調査研究にまでいたっていない。そのための試論といった段階で終わらざるをえないことをあらかじめおことわりしておく。

(1) Leo Strole, "Social Integration and Certain Corollaries; an Exploratory Study," A. S. R. vol. 21, pp. 709-716, 1956. R. K. Merton, "Anomie, Anomia and Social Interaction: Contexts of Deviant Behavior," in M. B. Clinard ed. *Anomie and Deviant Behavior*, pp. 213-242, 1964.

(2) 前者についてはすでに「アノミー理論の現代的課題——社会的・心理的アノミーの統合化をめざして——」で述べたことがある。

二、アノミー研究の基礎視角

アノミーは言うまでもなく、デュルケムの『社会分業論』で、分業の異常形態の一つとしての無規制的分業以来、社会学の専門用語として用いられるようになってきた。⁽¹⁾そこでは分業が連帯を生み出さないのは、諸器官の諸関係が規制されていないからであり、それらの関係が無規制状態にあるからであり、この無規制状態は「連帯的諸器官が充分な接触をしていないか、十分に持続的でない」⁽²⁾ことに由来している。たとえば各産業が一国あるいは全世界の全面に散在している消費者のために生産するようになると、接触は不十分となり、市場は無際限となり、生産は制限と規制を欠く。これが経済的諸機能を混乱に陥れ、いわゆる恐慌を生ぜしめることになる。

同じくデュルケムは『自殺論』において、自殺の一形態として、無規制的(アノミー的)自殺を類型化している。⁽³⁾集合的秩序の混乱という危機の状況においては——経済的な恐慌にしろ、異常な繁栄にしろ——「生活の条件が変わるから欲求を統制していた段階はもはや同一であることはできず、解放された社会的力が再び均衡を見出さない限りは、その相互の価値は不確定であり、従って又一時すべての統制が欠ける」⁽⁴⁾ことになり、人はこの無統制の状況においては欲望が抑制されずに、無限に手段をこえて目的を追い求め、無限病にとりつかれてしまう。ここから生ずる

自殺がアノミー的自殺である。このようにデュルケムにおいては、あくまでもアノミーは個人の外部に存在し、個人を拘束している社会の統制力（集合表象）の弛緩である。現在ではこの無統制は経済界においては慢性的な状態にあるという。

デュルケムの欲望—手段の齟齬を継承し、アノミーの原因を現代社会にはつきりと位置つけたのはマートンである。彼は社会的文化的構造のいろいろな要素のうち、文化的に規定された目標や目的と、これらの目標を達成するための一般的に承認された仕方を統制する規範をとりあげ、前者があまりにも強調されて後者がふみにじられるようになると、制度的規範は衰耗し、不安定な社会になり、アノミーが出現すると主張する。すなわち「文化構造と社会構造がうまく統合されないで、文化構造が要求する行為や態度を社会構造が阻んでいるとき、規範の崩壊すなわち無規制状態への傾向が生ずる」⁽⁵⁾のである。たとえば現代のアメリカ社会は文化的目標である金銭的成功が非常に強調される反面、これと同等にそれを達成する機会が充分に開かれていないため、アノミックな状態にあると言っている。

このようなデュルケム—マートンの主張するアノミー状況におかれた個人は、欲望が統制されないで肥大し、達成不可能から生ずるところの欲求不満に陥るか、あるいは open-class-ideology という虚偽の意識のもとに、自らの社会的存在からは到底不可能な目標を追い求め、結果として達成不可能から生ずる欲求不満に陥る。デュルケム、マートンはこのフラストレートされた精神状態を決してアノミーとは定義していない。したがって「自殺」あるいは「逸脱的行動」はあくまでも社会的アノミーへの適応であり、その適応行動のきっかけとなった孤立感、分離されているという感じ、無力感などの主観的な側面はアノミーとは言えない。

デュルケム・マーティンの系譜とは別に、デュルケムのアノミーの主観的側面を継承したものの代表として、グレイシアのアノミー論がある。デ・グレイシアはデュルケムが主観的な意味で考えていたアノミーの三つの特徴を、心をうずかせる「不安定感ないし不安感」、集団ないし集団の基準からの「疎外感」、当てどもない感じないしは「一定の目標の不在感」であると⁶⁾する。個人をこのような精神状態に陥れるアノミーを、彼は個人と政治共同体を結びつける信念体系の崩壊(アキートアノミー)と、その脆弱性(シンブルアノミー)とに求め、それを分離—不安のメカニズムを軸にして、種々の場面で検証していく。またマッキーバーは(1)価値の欠如によって人々の生活は無目的である。(2)自分自身のために権力のような手段を追究する。(3)意味のある人間関係から分離されている。ときに人々は社会から分離されているという個人的な感じ(isolation)を持ち、その精神状態をアノミーとする。

デュルケムのアノミーの主観的側面の系譜をひく研究と、前述したマーティンの「社会構造とアノミー」の中でのアノミーへの適応行動様式の類型化は逸脱的行動の分析に非常に大きな刺激を与え、アノミーにかんする経験的な研究が急速に進んだ。アノミーを測定する尺度が検討されるようになったのは当然のことである。スロールのアノミーの五つの尺度はその代表的なものと言えよう。実際、アメリカの社会学雑誌にみられるアノミーの研究は、態度調査による主観的アノミー——疎外感、孤立感などの「感じ」——を測定し、階層、職業、人種との相関をみるという形で、アノミーを実証していくことがほとんどである。調査技術の進展は、かなり困難な意識や態度を引き出すことを可能にしてきてはいるが、その自信がかえってアノミーの社会的な性格をあいまいにし、心理学的な傾向に拍車をかけたとも考えられる。

しかし前述したように、アノミーは「社会体系の中の個々人の精神状態ではなく、社会構造の特性に関係」し、「行動を支配する社会的基準の破壊と関係」し、「社会凝集力が弱いこと」を意味しているのである。したがってスロールのアノミー尺度も個人の認識レベル、態度レベルで測定するものであり、アノミアの尺度である。それを即社会的アノミーの測定だとすることは、若干の注意を必要とする。アノミーとアノミアとが全く無関係に存在することはありえないし、社会的アノミーの傾向が強まれば、個人はアノミックになることはさげがたい。しかし、社会的アノミーは個人がアプリアリにアノミックになったことよって生ずるのではない。アノミーを引きおこす原因は、あくまでも社会構造に求められねばならない。が、アノミーとアノミアとを概念上区別することは正当でありながら、両者を区別して実証していくことはかなり困難なことである。ここに社会的レベルのアノミーと個人的レベルのアノミーの連結し運動する接点に、アノミーの経験的な研究のための視角をすえることの必要性がある。私はこの基礎視角として「生活構造」のレベルを以前提案した。

生活構造という概念は、家政学や社会福祉学で主に使われていたが、社会学でも「個々の聚落社会における生活現象の中にみられるさまざまな時間的秩序の一組と、空間的秩序の一組の組み合わせ」——鈴木栄太郎『都市社会学原理』——、「ある生活体の全生活分野にわたって、そこにみられる物質的・社会的・文化的諸条件と、時間的・空間的枠組みと、具体的な行動パターンの体系化された複合体」——青井和夫『日本人の生活時間』——、「個人を中心として彼が占める地位と役割のセットに基づいて、行なわれる行動の体系」——塩原勉『社会変動における運動課程』——、「個人の諸社会層と諸集団への参与の総体」——倉沢進『都市化と都会人の社会的性格』——、「個人を準拠点

としてみた社会構造と文化体系との接触の様式」——鈴木広「社会的移動論序説」⁽¹²⁾——などさまざまに規定されている。が、鈴木栄太郎の規定を除いてはいずれも準拠点となるのははっきりと個人であり、その個人と社会構造、あるいは個人と社会構造・文化構造とを媒介する概念である。平たく言えば、「個人の私生活を中心において、その個人が社会的行動を通じて、広い社会に関与している仕方」と言えよう。

流動化の激しい現代社会においては、個人は家族や血縁集団のような第一次集団に埋没することなく、第一次集団をも含めてさまざまな集団に一面的、部分的なかかわり方をしているため、階層や集団レベルで個人の態度を測定することはかなり困難である。たとえば同一家族内の構成員であっても、家族以外の集団参加の仕方や、インフォーマルな人間関係がちがうことが、態度決定に重大な差異をもたらすと考えられる。したがって諸個人の態度は単に個人を家族や集団に内包されたものとしてみるのではなく、その個人の持つ生活構造との相関でみなければならぬ。逆に、形態的には集団参与の総体としての生活構造は、諸集団の体系としての社会構造の変動を直接蒙る。したがって社会構造と社会的態度との相互関係は、生活構造を媒介とすることによって、一段と明晰さを増すと思われる。

社会的アノミーを生ぜしめる構造的起因は、各個人の生活構造の各要素間に緊張や解体をもたらす。たとえばマーティンの提出した金銭的成功目標の強調と、現実の上昇機会の欠如との矛盾は、生活構造レベルでは上昇へのアスピレーションと、職業、学歴、収入などの地位の体系との齟齬として現われる。この矛盾はすでに現代社会においては慢性的化しており、それへの適応行動様式は、緊張した生活構造のままパターン化されていると言えるであろう。しかし矛盾を孕んだままの生活構造は、社会的アノミーの傾斜が強まるか、あるいは別の媒介変数の作用によって、さら

に緊張の度を増し、パーソナリティーの不統合をもたらす。この不統合による無力感、無規則感、自己疎隔といったものがいわゆる心理的アノミーで、個人はパーソナリティーの統合への適応として生活構造の安定化をはかる。この安定化への行動様式が社会的規範によって容認されるかあるいは拒絶されるかによって、正常な行動と逸脱した行動とに区分される。逸脱か否かは社会的な基準をどこに置くかによって決定されるものであって、逸脱的行動とされても、個人にとっては生活構造の安定ということではごく正常なことと考えられる。下位文化がそのいい例であり、この下位文化が今度は逆に全体社会の規範の凝集力を弱め、アノミーへの傾斜を強めることにもなる。このメカニズムについては後で述べる。

ここで私なりに社会的アノミーと個人的アノミーの定義づけをしておくと、社会的アノミーは「社会構造と文化構造とのギャップにより、制度化された規範が統制力を失った状態」であり、この社会的アノミーが諸個人の生活構造を緊張させ「生活構造の緊張により、内面化された価値の崩壊ないしは葛藤状態」をひきおこす。これが個人的アノミーということになるであろう。

このように生活構造のレベルに視点をすえれば、社会的アノミーと個人的アノミーとを連動したものととして、統合的に把握することが可能であると考えられる。ところで、個人の側からは生活構造の流動化や緊張としてとらえられるアノミーは、現代社会においては地位体系の部分的な変化による地位不整合といったものを媒介として露呈してくる。この小論では地位の変化、すなわち社会的移動を生活構造を緊張させる要因として取り上げる。ここにアノミー研究と社会的移動との接点を見出すことができる。

- (1) R・K・マートンとデ・グレーシアによると、アノミーという用語を社会学の用語として復活させたのはデュルケムであると言っている。
- (2) E. Durkheim, *De la division du travail social*, 1893, 井伊玄太郎・寿里茂共訳『社会分業論』(一九五七年、理想社、下巻一六八頁)。
- (3) アノミー的自殺の他に、デュルケムは利己的自殺、愛他的自殺、宿命的自殺の四つに類型化している。そのうち利己的自殺の原因としての利己主義の概念要素は、厳密な操作を経ずにアノミーに含めて継承している人が大部分であるという折原浩の指摘がある。
- (4) E. Durkheim, *Le Suicide*, 1897, 鈴木宗忠・飛沢謙一共訳『自殺論』(一九三二年、宝文館)三二六頁。
- (5) R. K. Merton, *Social Structure and Anomie*, in *Social Theory and Social Structure*, 1949, 森重吾・森好夫・金沢実・中島龍太郎共訳『社会学論と社会構造』(一九六一年、みすず書房)一五〇頁。
- (6) Sebastian de Grazia, *The Political Community—a Study of Anomie*, 1948, 佐藤智雄・池田昭他共訳『疎外と連帯』(一九六六年、勁草書房)序論。
- (7) スロールのアノミーの五つの尺度とは、①コミュニティのリーダーたちが個人の欲求に無頓着であるという知覚、②基本的に予測不可能な秩序のない社会では、こくわずかしか成就できないという知覚、③生活目標は実現されるというよりむしろ後方へ退いているという知覚、④生活目標が自分の子供のためのわずかな意味しかなく、こくわずかな見通ししかないという無力感、⑤社会的・心理的な支えとなる集団に参加できないという確信、の五つである。
- (8) R. K. Merton, *Ibid.*, p. 226.
- (9) マートンはアノミーとアノミアとを相互作用のメカニズムで結びつけている。
- (10) 『変動期における社会心理』今日の社会心理学。
- (11) 『社会学評論』第九卷、第四号。
- (12) 『哲学年報』第二八輯。

三、社会的移動の効果

社会的移動にかんするこれまでの主な研究は、移動の量、方向、比率、距離などの客観的な側面を測定することによって、その社会の構造の閉鎖性、開放性を問題にすることがしばしばであった。それは異質の文化構造を持つ社会あるいは集団間の比較という手法をとった。結果としての移動率の高さは、ますますオープンな、自由な社会になりつつあるという、虚偽ではありながら明るい見通しを与えることが多かった。

しかしながら逆に、この移動がもたらす効果の否定的側面についても、古典的にはデュルケムの「自殺」をはじめ、多くの研究者の目が向けられている。⁽¹⁾それは社会的移動論の古典とも言われるソローキンの『社会的移動論』（初版一九二七年）にもすでにみられる。この著の「社会的移動の結果」⁽²⁾という第六部は、一、一つの社会を構成する人種についての移動の効果。二、人間の行動と心理についての移動の効果。三、社会過程と社会組織の領域での移動の効果。という三つの部分から構成されている。その中でもとくに第二章の部分では、移動が精神活動を活発にし、発明や発見や知的生活の増進をもたらすという肯定的な効果とともに、移動は精神病、皮相性、懷疑主義、冷笑主義、「保守主義」、親密さの減少、社会心理的孤立、孤独、道徳の非統合を強めるなどといった、移動の個人の態度に及ぼす否定的な影響について述べられている。また第三章では社会的レベルにおける文化的な混乱について述べられている。ソローキンによる移動者は旅行者と同じく、ある「社会的ボックス」に長くとどまることがないので、いろいろの事を良く知っているが、全て表面的で雑多なものよせ集めである。それは時には相対立する理論やイデオ

ロギーを持つほど複雑になる。この複雑さのもとでは移動者は何に対しても懐疑的な態度をとり、確固たる信念や確信を欠く。さらに移動の増減は「親密さのチャンス」に影響を及ぼす。非移動社会では他者と親密な関係を結ぶことがたやすいが、移動社会ではそうはいかない。人々は所属している集団や地位を常に変化させているので、他者と親密な関係を結ぶためのチャンスにめぐまれていない。したがって「社会心理的な孤独」が強くなる。また現代人は「土着的な場所、職業、政党、国、宗教、家族、市民権など」と自分を結びつけている紐帯を切り離していることが多い。その結果「次第に彼は何ものにも、何人にも愛着しなくなる。」彼は「自由」になり、社会的に孤立したアトムとなる。次に、移動者は異なった基準やモラルをもった位置から位置へと移動していくために、確固とした規定がなされた習慣を教えこまれない。そのため道徳の不統合、犯罪、道徳の頹廃がおこる。また社会階層はこの異なった習慣や道徳を身につけている人々の集合体から成ることになり、集合体としてのまとまった文化的スタイルに統合されなくなり、持続性もなくなると言う。

ソローキンの移動の効果についての幾つかの仮説の中で、社会心理的孤立、あるいは孤独といった「分離仮説」(dissociative hypothesis) の検証が、R・A・エリスとW・C・レーンによってなされている。⁽³⁾これは高い地位の大学へ入学した低階級の学生にかんするパネル調査のデータを用いて、上昇移動のもたらすパーソナルな効果について、ソローキンの「分離仮説」と、精神分析のアプローチをとる「補充仮説」と、準拠集団のアプローチをとり分離状況を改良する「改良仮説」の競合しあっている三つの仮説を検証しようとしたものである。結果は上昇移動をした青年は制度的な観察者の目を通じてみても、また個人的な経験からしても、分離されているという経験とパー

ソナルなストレイシとを不均等に割り当てられている。これはソーキンの「親密さの減少と心理的孤立、孤独さの増大」の経験という仮説をエビデンスとしている。上昇移動と分離の場面に競合している他の二つのアプローチ——精神分析的アプローチ、準拠集団理論のアプローチ——はいずれも支持されなかった。前者は幼年時代に効果的な第一次集団のきずなを確立することに失敗したこともたらず効果に、分離のエビデンスを求めようとするものであるが、これによると社会的分離は移動の直接的結果ではなくて随伴物としてとりあつかわれる。後者では、先取りした社会化が移動の悪性の効果を避けるのに役立ち、先取りした社会化がなされなかった場合に分離が生ずるとするものだが、これによると分離は移動のノーマルな結果ではなくて、潜在的な結果としてとりあつかわれる。ところが、効果的な第一次集団のきずなを作るための無能力さや社会化の欠如ということはなくとも、上昇移動者は移動した直後に疎隔さを感じ、学問やスポーツといった技術的な上達に関係している場面以外での成功を阻止され、社交クラブ、イーティングクラブ、異性とのデートといった仲間集団での承認を受けられず、主観的な自己疎外感をこうむっているという事実があり、これらの事実から三つの仮説の中でソーキンの上昇移動の分離仮説を支持している。

また、社会的移動のもたらす効果として、ブラウの「社会的移動と人間関係⁴⁾」は、見のがすことのできないものである。ブラウは社会的な移動（主に職業移動）が、上昇にしろ下降にしろ人間関係を確立する上で、特殊なジレンマに人々を陥れることを示している。移動人はマーシナルマンであって、彼らは出身階層においても新しく入りこんだ階層においても、その両方の階層の人々とうまくいかない点がある。この「移動者が人間間の関係において直面するジレンマが社会的統合を妨げ、彼らの態度や行為の基因となっている⁵⁾」という仮説のもとに、このジレンマが文化

変容、社会的不安、過同調の出現という移動の否定的な結果をもたらすことを問題にする。これを移動の二つの次元——職業階層間の動きとプレステイジ集団間の動き——との関係から、職業集団がどの方向に変化しようとも、社会的所属の変化を含まない時には人間関係は不愉快なものとなり、社会的所属の変化を含む場合は移動経路の意味は弱まるとする。もちろん上への移動者と下への移動者とは人間関係のなかで直面するジレンマは異なる。上昇移動者にとっては二種類の社会的満足間の選択というジレンマであり、逆に下降移動者は二種類の社会的喪失間のジレンマである。このように職業移動は、人間間の関係、すなわち出身階層や到達階層との相互関係について特殊なジレンマを生み出すことが示される。このジレンマの相互関係が、移動者の生活態度を強く規定するわけである。

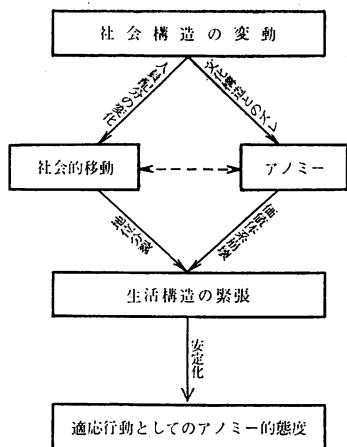
ソローキンをはじめこれらの移動の効果にかんする研究は、社会的移動が個人に何らかの悪効果をもたらすことを示している。その方法も移動を個人の経験として、移動者の側から観察するという移動の主観的側面での研究である。それはソローキンにあつては「社会的ボックス」を転々とする旅行者としての経験であり、エリスらにおいては、移動後の仲間との関係における自己疎隔の経験であり、ブラウにおいては、移動者の移動前あるいは後の階層にある人々との人間関係のジレンマであつた。これらの分離、ジレンマの経験は移動者の前述した生活構造の緊張によって引き起こされると考えられる。すなわち客観的には人員配分の組みかえによって社会的移動は生ずるのであるが、個人の側からは移動するという経験として直面される。したがって、社会構造と個人とを結びつける主体の生活構造の変化として移動をとらえなければならぬのではあるまいか。よつて、移動の否定的な効果にかんする分析視角も、生活構造に置くことが最適である。

- (1) 移動の効果にかんする研究は、移動と政治的態度との関係にかんするものが比較的多いことは、リフセツト・ベンディックスの『産業社会の構造』での指摘のとおりである。
- (2) P. A. Sorokin, *Social and Cultural Mobility*, 1959, pp. 493-546. (この書は『社会的移動論』と『社会的・文化的ダイナミクス』の一部を含む)。
- (3) R. A. Ellis and W. C. Lane, *Social Mobility and Social Isolation: A Test of Sorokin's Dissociative Hypothesis*, A. S. R. vol. 32, 1967, pp. 237-253.
- (4) P. M. Blau, *Social Mobility and Interpersonal Relations*, A. S. R. vol. 21, 1956, pp. 290-300. この論文は鈴木広訳編『都市化の社会学』(一九六五年、誠信書房)に収録されている。
- (5) *Ibid.*, p. 290.

四、社会的移動の効果とアノミー

これまでの章でアノミー研究の基礎視角と社会的移動の効果分析との接点が見い出されたと思うので、ここでは社会的移動とアノミーとの関係にかんする分析モデルについて考えていきたい。が、その前に誤解を招かないようあらかじめ申しておきたいことは、社会的移動とアノミーとの関係について考察するということは、単にアノミーの原因を社会的移動に求めるということでは決してないということである。アノミーは世襲的・土着的な社会ではシンメル(1)の「Freunden」としての商人や旅行者といった形態でしか問題とならなかつた。が、資本主義の発達と高度化とともに社会構造と文化構造の矛盾が激しくなり、アノミーへの傾斜は高まったと考えられる。これは、S・コールとH・ズッカーマンの作成した「アノミー研究目録」(2)によって、アノミーの研究が二〇世紀前半から序々になされ、五五年

以降急激に増加していることが、逆説的ではありながらアノミーへの傾斜が強くなったことを示していると言えよう。一方、社会的移動も分業の開始とともに、貴族社会においてもエリートエリートの周流という形では存在したが、それはエリートとして上昇したり、それから下降したりという部分的な領域でのみしか問題にならなかった。大衆的に移動経験が云々されるようになったのは、農村から都市への大量の肉体労働者の移動、すなわち産業資本主義の発達と歩調を共にしている。したがって、社会的移動とアノミーとはその根源的な原因は同じところにありながら、個人の生活レベルにおいては社会的移動という経験を通じてアノミーの態度が現出すると考えられるために、分析上独立変数として移動が設定されるにすぎない点は注意しなければなるまい。



さて、社会的移動とアノミーとの関係は、図のように巨視的に見れば、社会構造の変動が、文化構造とのギャップ

を大きくし、社会的アノミーへの傾斜を強める。またそれは社会的位置の配分状態を変化させ、社会的移動を起こす。これは移動の客観的側面での研究が、社会構造と社会的移動との関係を、移動の量、方向、経路などを歴史的に国際的に階層的に比較分析するという方法で従来から多くなされてきたことからわかる。このアノミーと社会的移動によって、個人の生活構造はきわめて緊張状態に陥れられる。生活構造の緊張は社会的アノミーへの傾斜が強まることのみでも生じうるし（価値体系の崩壊）、社会的移動の結果からのみでも生じうる（地位

分裂。これらのメカニズムがこの小論でとりあげようとした主たる問題領域である。社会的移動が頻繁に起こることは、社会全体にますます虚偽のイデオロギーではありながら open-class-ideology を蔓延させ、マートン流の社会的アノミーへの傾斜を強めるための基盤となりうる。逆に、アノミーへの傾斜すなわち社会的な規範の弛緩は、社会的移動を容易にし、それをうながす文化的エネルギーとなりうる。この社会的移動とアノミーとの関係は、生活構造のレベルに視角をずえることよってのみ、そのメカニズムを明らかにすることができる。さらに生活構造の緊張はパーソナリティ崩壊を避けるために、人々をして生活構造を安定させる方向へとかりたてる。その結果、人はさまざまな適応行動をとる。これはマートンのアノミーへの適応行動様式の類型に代表されるような、同調的あるいは逸脱的行動となつて表面的には現われる。⁽³⁾

逆に、逸脱的行動の析出は、個人にとっては生活構造の安定化へのプロセスではあるが、今度はそれが社会現象として社会的アノミー現象を出現させることとなり、文化的規範の変革をうながす。マートンはこのプロセスを相互作用のメカニズムを用いて説明する。まずアノミーに傷つけられやすい人から逸脱的行動をなし、その人と同じ社会体系内で相互関係を持つ他の人々に影響を及ぼし、逸脱的行動が増大し、これを統制するメカニズムが十分に活動しなれば、規範構造をますます破壊すると述べている。⁽⁴⁾ この文化的規範の変化と社会構造の変動とのズレが、まさに社会的アノミーの原因である。以上の相互作用によつて、個人的な態度と、社会構造と文化構造とのギャップから生ずる社会的アノミーとの関係が明らかにできると思う。ここで社会的移動は、社会構造の変動が個人にとっては、移動の経験という形で直面させられるため、生活構造を類型化するための尺度としてきわめて有効な概念となりうる。それ

がアノミー的態度を移動に基因させるという誤謬に陥れる原因となつていとも考えられる。がしかし、この点を注意深く考慮しながら、次に生活構造レベルで、社会的移動と社会的態度との関係を徹視的にみていく。移動が上昇にしろ下降にしろ地位体系の組み合わせを変更させ、地位分裂をもたらすことによる結果は、レンスキューラの「地位結晶度」の研究に多くの業績がある。この地位体系はそれぞれ階層体系ごとに異なる文化的規範を持ち、その葛藤をもたらす。生活構造の緊張、崩壊は世代間移動よりも世代内移動において、また移動前後の時間的な幅は近ければ近いほどより強烈に現われることになる。地位分裂の類型によって移動の結果は異なるが、さらにそれを多様化せしむるのは、社会的コンテキストでの移動に対して、文化的コンテキストが加わるからである。このことはM・E・シン普森の「社会的移動と無規範、無気力」の論文で、異なった社会構造と文化的コンテキストを持つ社会での移動が、無規範、無気力の異つた影響を及ぼすことの検証によって示されている。この研究は職業移動と教育移動の効果として、normlessness と powerlessness の状態をみる際に、異なった文化的コンテキスト（移動が制度化されているかないか）を媒介としている。職業移動は異なった文化的コンテキストの中の移動した者に対して、異なるインパクトを与える。すなわち、アスクリプティブな社会では強い normlessness を生み出したが、アメリカのようなアチーブドな社会ではそうではない。が、下降移動の場面には全ての国で powerlessness を生み出す。これは移動者を受け入れる文化が、個人においては移動に対する動機づけとして存在し、移動が期待されているのに上昇移動に失敗することが人をアノミックにさせるが、実際に移動した人は到達した階層に容易に受け入れられる。逆に、移動が制度化されていない閉鎖的な社会では、移動者は出身階層においても、到達階層においてもよそ者として見られるため、いずれにしてもアノ

生活態度の諸類型

文化的コンテキスト

階層	社会的移動	動機づけ (アスピレーション)	あり	なし
上	安定	上位	野望型	満足型
	移動	上位	達成型	○たなぼた型
下	安定	下位	○不満型	逃避型
	移動	下位	○逆行型	○無抵抗型

○は緊張タイプ

社会的移動とアノミー

ミックになるといふ。すなわち、意識の移動、言いかえれば移動への動機づけがあり、移動に対する先取りした社会化がなされているかどうかによって、それぞれの移動者にとっての移動の意味が随分異なるからである。移動への動機づけがなされた上での移動は地位分裂を招いても、地位ごとの規範の崩壊ではなく、規範の統合を結果し、意識と現実とにギャップが存在しないために、かえって生活構造は安定していると考えられる。逆に、マートン流のアノミー定義によれば、意識の移動性はあっても、現実の移動がそれに伴わない場合に欲求不満が強くなる。これらのことを考慮して生活構造の類型化と、そのもたらす生活態度との関係は、上の表のように整理できると思う。

具体的には社会的コンテキストは職業、学歴、収入、地域などの個人を社会構造に結びつける地位（階層化可能なもの）の変化をインデックスとして用いる。移動への動機づけないしは先取りした意識の上での移動が文化的コンテキストで示される。社会構造のもたらす効果は、この社会的コンテキストと文化的コンテキストを指標とした生活構造のマトリックスに分散する人々の比率で表わされる。たとえば社会的アノミーへの傾斜は、下位にありながら上昇アスピレーションの高い不満型や逆行型に位置する人々を増加させるであろう。

次に簡単にそれぞれの類型の特徴について述べてみたい。

①野望型——上位に安定していながら、なお強く上昇へのアスピレーションを持つ。このタイプは社会構造とそれに見合った文化的コンテキストを持ち、最も安定した生活構造である。

②満足型——このタイプは上位に安定しており、それに満足している。それ以上の上昇アスピレーションは持っていない。

③達成型——上昇アスピレーションが高く、実際の上昇移動がそれに伴っている目標達成型である。高いアスピレーションが実際の移動を伴うことを示した研究があるが、このタイプは移動とアスピレーションが一致しているため生活構造は安定している。

④たなぼた型——これは上昇へのアスピレーションは無いのに、実際には上昇していくタイプである。主体の側のアスピレーションは低くとも、客観的な好条件のために上昇すると考えられ、先取りした社会化がなされていないために、階層的には上位にありながら、生活構造は緊張すると思われる。

⑤不満型——下位に安定しているが、上昇アスピレーションは持っている。目標と現実とのギャップがあり、マートン流のアノミーによる不満度が高いと思われ、生活構造はかなり緊張する。

⑥逃避型——下位に安定しているのみならずアスピレーションも持たない。社会的な接触ないし、社会的活動での積極性には欠けるが、生活構造は下層の中では唯一の安定タイプと言えるであろう。

⑦逆行型——下位へ移動しながらなお上昇アスピレーションは持っている。意志とは逆の方向へ客観的な存在が陥

れられていくタイプであり、生活構造は目標と現実が逆行しているため一番緊張する。

⑧無抵抗型——下位に移動しても、状況のなすままといったタイプで、上昇アスピレーションは持たない。しかし移動の影響によって生活構造は緊張するものと考えられる。

大まかに言って、生活構造の緊張は下層グループで高いことが示される。安定上位はアスピレーションが高いにしろ低いにしろ生活構造は安定していると考えられる。その反面移動下位はいずれにしろ生活構造は緊張する。あとの移動上位と安定下位とはアスピレーションの有無によって、生活構造の安定—緊張とに分離する。この分離がきわめて主要なポイントであり、ここに生活構造概念の意義があると思う。

ところで表で指摘した緊張タイプが安定化の方向へと移向する際には、横への平行移向であれば簡単である。たとえば型↓達成型は、文化的コンテキストのアスピレーションを内面化することによって、不満型はアスピレーションレベルを下げるか、目標を捨てて逃避型へである。無抵抗型は逃避型へと時間的な経過によって比較的簡単に移向できるであろう。が、逆行型は安定化へのプロセスはかなり困難であるように思われる。いずれにしろ生活構造の諸類型やその安定化のメカニズムが、社会的な態度（ここではアノミー的態度）や逸脱的行動様式を分析するのにきわめて有効なものであると言うことができよう。

そこで最後に問題となるのが、従属変数としてのアノミー的態度についてである。一般的にアノミー的態度は、ジーマンの疎外の五類型⁶⁾に見られるように、疎外感の一類型として表現されたり、アノミーを *normlessness* と *powerlessness* の二つの尺度に分類して測定されたり、デュルケムの巨大化されすぎた社会にバラバラにされた個人の

状況から、「社会との接触を欠いた個人的感じ」(isolation)で示されたりである。現に、スローラの五つの尺度もそれらを包括していると言える。これらの感じはいずれもが社会学上の系譜を持って発展してきており、それぞれを並列して、はっきりと区分することはきわめて困難である。現代では疎外感とアノミーが混淆されて用いられ、いずれもがそれぞれ多様な意味を持たれすぎて、その結果、双方の概念が曖昧模糊たるままに実証に移されているようである。生活構造の緊張による個人の状況の認知された感じが、無力感であるか、孤立感であるか、目標喪失感であるかといった感じ方の差異は、当面している問題点とは少しズレる。がしかし、アノミー尺度を経験的実証研究にたえうるものとして確立する事は必要不可欠の問題ではある。しかし、この小論は社会的移動とアノミーにかんする研究の、基礎視角についての若干の指摘をすることを主たる目標にしているものであり、アノミー尺度を提示して仮説を検証するところまでに至っていない。いずれにせよ主観的アノミー尺度は今後の重要な課題の一つである。

(1) G. Simmel, Exkurs über den Fremden, *Soziologie*,

(2) S. Cole and H. Zuckerman, Appendix: Inventory of Empirical and Theoretical Studies of Anomie, in M. B. Clinard ed., *Anomie and Deviant Behavior*, pp. 243-311.

(3) 適応行動様式の類型化については「アノミー理論の現代的課題」で試みたことがある。

(4) 態度調査によって相互作用のメカニズムをとり入れることのみであると、そもそも客観的アノミーへの傷つけられやすさの差異が、パーソナリティーの次元で求められがちである点に、疑問が残る。

(5) M. E. Simpson, *Social Mobility: Normlessness and Powerlessness in Two Cultural Contexts*, A. S. R. vol. 35, 1970, pp. 1002-1013.

(6) 五つの類型とは powerlessness, meaninglessness, normlessness, isolation, self-estrangement である。

(7) マッキンバーのアノミーの規定はこの分離感である。

五、要 約

アノミーは社会的に規定されねばならない。それによってアノミーを単に既存のものとしてそれへの適應のみを考察していくという危険を免れることができる。アノミーの存在を実証することは、認知された態度を測定することではなく、その認知された態度を理解してはじめて可能となる。

この基本的な視角を維持しつつ、具体的な分析を試みる際のキー概念となるのが生活構造の概念である。生活構造は社会構造と個人を結びつけている地位役割の体系としてのみではなく、文化的コンテキストでのかわり方をも含めることによって、より有効な概念となる。

社会的移動が社会的態度に大きな影響をおよぼすことは、これまでの研究で指摘されている点であるが、アノミーの態度は社会的移動によって生ずるのではなく、社会的移動を媒介として露呈してくる。したがって社会的移動を生生活構造レベルでとらえ、それを軸にして個人的レベルのアノミー度を測定することが必要である。そうしてはじめてアノミーの態度を理解することができる。

社会的アノミーの存在は生活構造の諸類型のもたらす緊張タイプの増加として検証することができよう。ここに社会的アノミーと個人的アノミーとを連動的なものとしてとらえる視角の可能性が示される。

以上のようにこの小論は社会的移動とアノミーにかんする基礎視角を問題とするのみに終わったが、今後の課題として、アノミーの原因を見失うことなく最大限にアノミーの存在を実証していきたい。